

サケ(シロザケ) 日本系

Chum Salmon, *Oncorhynchus keta*

管理・関係機関

北太平洋溯河性魚類委員会 (NPAFC)

日口漁業合同委員会

最近一年間の動き

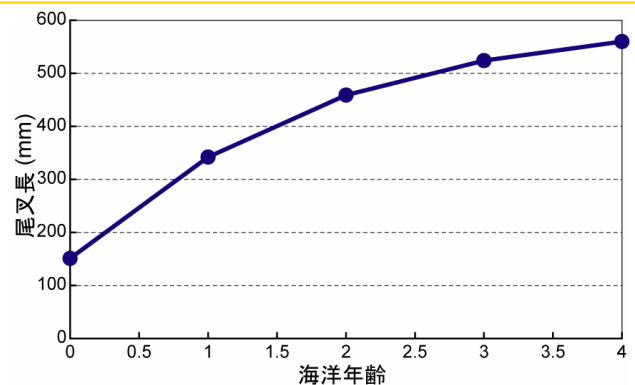
2005 年漁期の沿岸漁獲量は 6,450 万尾であった。水揚げ単価は、活発な輸出需要によって上昇し 259 円/kg となった。そのため、漁獲量が減少したにもかかわらず、水揚げ金額は増加し 577 億円となった。8 月末から始まった 2006 年漁期の漁獲量は、前年度同期と比較すると減少している。

生物学的特性

- 寿命・成熟年齢: 2~7 歳
- 産卵期・産卵場: 秋~冬、北日本の河川
- 索餌期・索餌場: 夏、ベーリング海
- 食性: 水生昆虫・落下昆虫(河川)、動物プランクトン・マイクロネクトン(海洋)
- 捕食者: ウトウなど海鳥・ウグイなど魚類(幼魚)、ネズミザメなど大型魚類・オットセイなど海産哺乳類(未成魚・成魚)、ヒグマなど陸生肉食動物(成魚)

利用・用途

塩蔵品(新巻、山漬、定塩)、生鮮・冷凍品(焼魚、石狩鍋、三平汁、チャンチャン焼、ステーキ、ムニエル、ルイベ)、乾製品(トバ等)、燻製、フレーク、練製品、缶詰、筋子、イクラ、氷頭なます、いずし、塩から(めふん)、成魚の皮革は民芸品



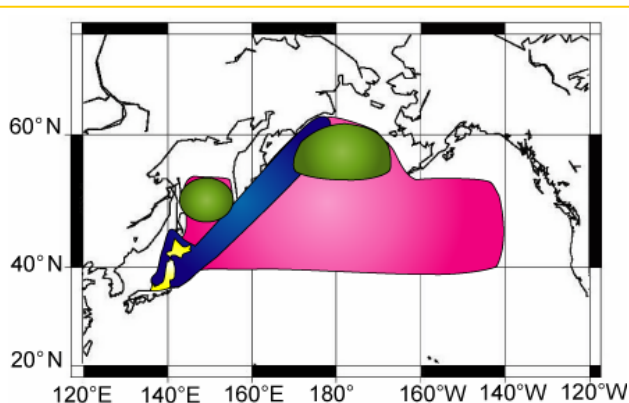
7月の北太平洋のサケ未成魚の平均尾叉長

漁業の特徴

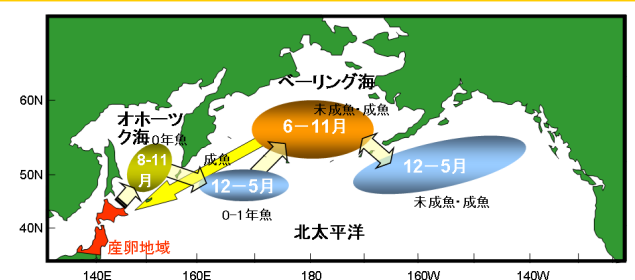
主に北日本の産卵河川周辺の沿岸で夏~冬季に定置網で漁獲される。北太平洋公海のさけ・ます漁業は禁止されている。他国経済水域内での日本系サケの漁獲量は不明である。日本で増殖対象となっている溯河性さけ・ます類のうち最も漁獲量が多い。

漁獲の動向

1970年代から沖合域の漁獲量は徐々に減少し、同時に沿岸域の漁獲量が増加した。最近5年間の漁獲量は 14.0~25.7 万トン(4,240~6,825 万尾)、2005 年の沿岸漁獲量は 22.3 万トン(6,450 万尾)である。



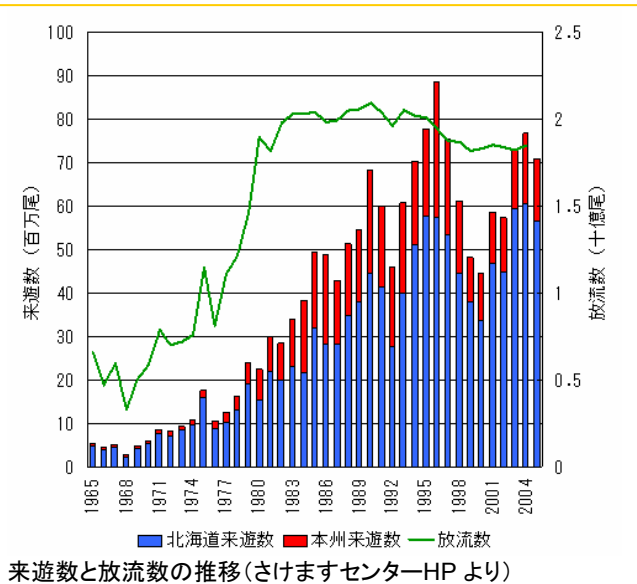
日本系サケの分布(黄色:産卵地域、青色:漁場海域、赤色:分布海域、緑色:索餌(夏季)海域)



日本系サケの主要な回遊経路の推定図(浦和 2000 を改変)

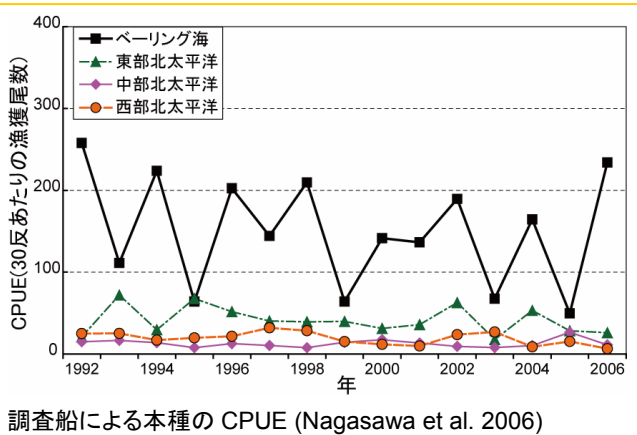
資源状態

稚魚放流数は、1960～1970年代にかけて増加し、1980年代から約20億尾で安定している。一方、成熟魚回帰尾数(沿岸漁獲尾数と河川捕獲尾数の合計)は、1960年代後半の約5百万尾から1990年代の約6千万尾と十倍以上に増加した。資源量と沖合資源量調査結果の推移から、現在の資源水準は高位と判断できる。また、近年5カ年間では回帰資源量は増加傾向にある。



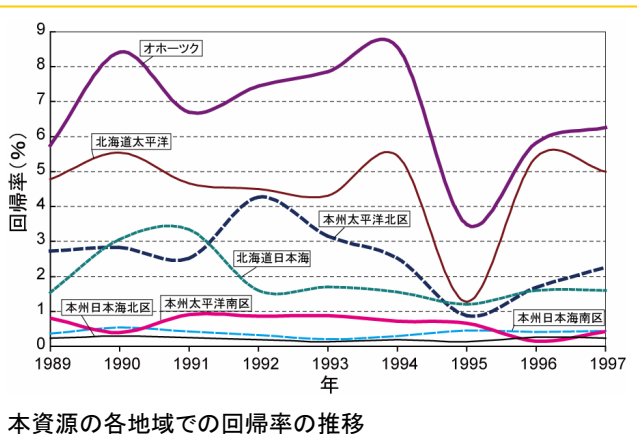
管理方策

回帰率への密度効果は認められなかったため、最大持続生産量及びそれに必要な最適放流数が算出できなかった。現在のところ、本資源の変動は大きいが歴史的な高水準にあるため、現在の水準の維持が望ましい。資源水準の維持には、近年の放流数約18億尾の維持が必要で、産卵親魚量一定方策による管理が適切である。海洋での体成長に密度効果が観察されるため、索餌域である北太平洋の生物生産を考慮した資源管理方策を開発する必要がある。



資源管理方策まとめ

- 現在の資源水準を維持
- 稚魚放流数・産卵親魚数一定方策が適切
- 推定回帰尾数と必要親魚数の差が漁獲可能量
- 海洋生産力を考慮した管理方策が必要



資源評価まとめ

- 稚魚放流数は安定
- 回帰率は高く資源水準は高位
- 近年5カ年間では増加傾向

サケ(シロザケ)(日本系)の資源の現況(要約表)

資源水準	高位
資源動向	増加
我が国の漁獲量 (最近5年)	暦年漁獲重量:20.8~26.4万 平均:23.1万トン